

明治大学人文科学研究所紀要 第50冊 (2002) 343—360

楊心流，長尾流躰術，天神眞楊流柔術「活法」について

手 塚 政 孝

A Literary Survey on Jujutsu Kappo (Resuscitation methods) of the Yoshinryu, Nagaoryu-taijutsu, Tenjin-shinyoryu Jujutsu Schools

TEZUKA Masataka

Kappo is a first aid method of resuscitating a person in a condition of syncope due to mechanical impact, strangulation, drawing, etc.

Although judo has gained worldwide popularity only recently, its martial arts origins are ancient. During the Sengoku Period of the 16th century, when jujutsu began its development as a military art, a special method of resuscitation called kappo was an established jujutsu technique.

In modern judo, several of the old methods of resuscitation are used. However many of these techniques have been handed down from generation to generation by word of mouth as secret methods, and very little scientific investigation of kappo has been attempted.

There seems little application of the technique of kappo in first aid outside of the sport of judo. This is understandable when we consider the history of judo, but unfortunately these techniques are being lost rather quickly. If we leave kappo as it is today, we will soon see it disappear into the shadows of cultural heritage.

Kappo is still a powerful tool in judo first aid, and I believe we need to conduct careful physiological studies of it, researching the history of kappo, recording its techniques, and making it clear that kappo should be persevered for future judo generations.

In this literary survey, I mentioned jujutsu kappo (resuscitation methods) of the Yoshinryu, Nagaoryu-taijutsu, Tenjin-shinyoryu jujutsu schools.

《個人研究》

楊心流，長尾流躰術，天神眞楊流柔術「活法」について

手 塚 政 孝

はじめに

これまで、古流柔術活法に関する調査研究として、「死活自在接骨療法柔術生理書」に記述されている古流柔術の活法などを中心に考察，報告してきた。

柔術そのものは，歴史的には日本に伝わる古流武術の一種目であり，徒手をたてまえとして，ときに武器をも使用する格闘武術である。名称も，小具足，腰廻り，捕手，和，柔，拳法，白打，体術などと呼ばれたが，柔術という名称は江戸時代初期から普遍化し，明治時代に柔道に発展し現代に至っている。古流柔術は，その流祖が実戦場裡における体験をもととして，主観的あるいは個性的工夫によって創られたものであり，しかも秘技として扱われたので多くの流派に分れた。同じ流祖の末流でも分派から分派を生み，しだいに多くの流派に分れてきた歴史的経緯がある。

その中で，活法は各流派の格闘武術としての技術体系の中で研究され，伝承されてきている。すなわち，活法は殺法(主として当身技)という技術体系と表裏一体となって発達，伝承されてきている。蘇生法としての活法の名称も数多く残されているが，その内容については秘伝・口伝とされてきた経過の中で，伝える人も少なく，不明の点も多い。

現在，柔道・JUDO と称せられ，国際的に発展している講道館柔道は，1882年に嘉納治五郎によって創始されたものであり，その技術体系の中で，今日も応用されている蘇生法としての活法には，主として絞め技によってもたらされる「落ち」(意識消失)の際に施される「呼吸活」と顴丸が蹴上げられるなどして腹腔内に押上げられた虚脱の際に施す「顴丸活」の二種類が継承されている。

嘉納は，青年期に最初に天神眞楊流柔術を学び，次いで起倒流柔術を学んで，他流派も研究しながら講道館柔道を起こして居り，技術面，精神面において多大な影響を受けている。すなわち，精神面においては楊柳の姿すなわち柔の理に徹すべきこと，技術面においては，固技，当身技，活法などに，特に天神眞楊流からの多くの影響を受けていると考えられる。そして，天神眞楊流が楊心流と眞之神道流を合流したものとされており，本調査研究では特に活法の研究が盛んであったと伝えられる楊心流柔術と天神眞楊流柔術，また金沢に伝えられその演武を観る機会のあった長尾流躰術に関して，活法を中心に調査研究を進めることを企図した。

楊心流柔術について

楊心流は、全国的に広く行われていた流派であるが、武芸一般に関する記述としては、天保十四年（1843）の「武術流祖録」にわずかに次の如く伝えられているにすぎない。

楊心流 秋山四郎左衛門義時

年暦ヲ詳ラカニセズ、肥前長崎ニ住ム。武官ト云フ者義時ニ授クルニ捕手三手、活法二十八手活ヲ以テス。後ニ義時其ノ奥旨ヲ究メント欲シ、太宰府天神ニ祈リ、遂ニ其ノ妙秘ヲ悟リ、捕手三百手ヲ工夫シ、而シテ楊心流ト号ス。云々。大江仙兵衛広富其ノ流ヲ中興ス。貞享年間ノ人也ト云フ。

流祖に関しては、事蹟が混用された形跡があり、不明な点もあるが、楊心流関係の伝書から判断して、流祖は秋山四郎義昌、二代目は大江千兵衛義時と見ることができる。秋山四郎義昌は肥前長崎の小児医師であり、中国武官から柔術の技法だけでなく、活法も併せて授けられたと伝えられている。

楊心流の流旨・精神に関しては、伝書「楊心流静間之巻」に、
 （略）蓋シ楊心トハ楊葉ノ風ニ靡キ且ツ変動常無キ如ク、敵ノ転化ニ因ルヲ謂フ。意ハカヲ以テ人ヲ制スル者ハ、心ヲ以テ人ヲ制スル若カズ。如何トラレバ、カヲ以テ争フ者ハ、人モ亦カヲ以テ此レヲ拒ム。此レ是レ何ノ益カアランヤ。（一略一）

と述べられており、楊心流では、楊柳の枝が細くしなやかで、微風にも直ちに順応して靡き、しかも自からの体を失わず持しているように、敵の変化に順応していつでも変動できる心とからだとの在り方を本旨としており、それに基づいて、流名も楊柳の蔵している精神・心を尊んで楊心流としたことがうかがえる。したがって、技も敵の動きに順応しながら、敵の虚を突いてこれを制することになり、力の争いを避けて、心の動きを尊び、心をもって敵を制することを流旨とした。

楊心流の技術体系を知るための資料としては、天和三年（1683）大江千兵衛が記した前掲「楊心流静間之巻」には、形として、真位、暫心目付、拔見目付、無刀別、立合請別、車捕、楊之位の名称が見られ、同じく「楊心流覚悟之巻」には、当身の部位を示す烏兎暗、雁下、松風、月影、水月、明星、村雨、籍留の名称が示されており、これによって当時の楊心流の技術の原形的なものを窺い知ることができる。四世河野巢安が元文三年（1738）三月赤崎平七に授けた伝書によって、楊心流の技術体系及び内容を更に詳しく知ることができる。

居捕

真位、暫心眼付、無刀別、袖車、膳越、車剣、駒返

立合

巻込、請別、立合拒、紅葉乱、腰附、腕塾、脛塾

壁添

肩車、御前捕、柄砕、拒、礮波、左右曲長太刀

行合

楊心流，長尾流躰術，天神眞楊流柔術「活法」について

後山影，脇山影，向山影，手金記，梅折枝，当投，頭捕

上段手数廿ヶ条

- 一，後捕独鉗之事 一，下藤之事
- 一，二人詰之事 一，問当之事
- 一，両非前之事 一，塾込之事
- 一，猿猴附身之事 一，摺流之事
- 一，袖緘之事 一，臥鹿一足之事
- 一，右剣之事 一，左剣之事
- 一，風剣之事 一，竜虎之事
- 一，車剣別之事

極意堅五ヶ条

- 一，小手堅 口伝 一，巴 口伝
- 一，三車 口伝 一，虎詰 口伝
- 一，片羽折 口伝

殺活

- 一，松風 一，急雨 一，稻妻
- 一，雁下 一，水月 一，明星
- 一，月影

楊心流心持覚悟ノ巻

- 一，病氣去事 一，動静目附之事
- 一，長短目付之事 一，遠近捕様之事
- 一，飛剣 一，籍留
- 一，大当之事 一，小当之事
- 一，釣合之事 一，扇形
- 一，四目手棒 一，三目手棒
- 一，太刀陰手棒 一，手火車
- 一，天火之事

これらの資料（伝書）によって，楊心流の技術体系及び内容を概観すると，その技術を，敵と生死を争う場面の形態によって分類・体系化し，(1)，居捕（坐った姿勢で相対した場合），(2)，立合（立った姿勢で相対した場合），(3)，壁添（壁に添う場合），(4)，行合（立った姿勢で双方から接近した場合）と配列し，これに，(5)，殺法（当身），(6)，活法（蘇生法）を加え，更に薬餌療法と関連して製薬法が伝えられている。

楊心流の技術面については，その根本を楊柳の精神にしていること，殺活のいわゆる当身を重視していること，またこれに伴う活法（蘇生法）を秘伝として伝え，更に怪我に対する薬餌療法をもそ

の教授内容としていたことなどが楊心流の特徴と見ることができる。

次に、楊心流と目されている古流楊心神道流の目録を調べていくと、その内容は、中段・居捕十四ヶ條、上段・立合十四ヶ條の計二十八ヶ條、阿手身（当身）極意十六ヶ條、雲上之伝（吐息、秘薬）、心法から成っており、殺活法関連を見ると、

阿手身（当身）極意

一、草靡	一、秘中	一、人中
一、烏乱	一、独鉗	一、烏兎
一、明間	一、松風	一、村雨
一、釣鐘	一、電光	一、月影
一、雁下	一、少寸	
一、水月	一、貫元	

雲上之伝

一、吐息之事 一、秘薬之事 口伝

心法、署名花押の後に、「殺活楊心流正伝系譜如斯」と記されている。

また、同流には古流楊心神道流経絡巻が残されており、これは、人体の主要臓器の位置と機能、各臓器の連絡、いわゆる解剖・生理に基づく当身の殺活法に関する極めてめずらしい伝巻である。

「松風ノ殺ハ、喉ノ当リニシテ、陽ノ位ナリ。此経ハ氣往スル所ノ道路也。人間上焦ニ咽喉ノニツ、左右二分レテ二管有リ。一つハ水穀ノ道路、其ノ一つハ息管トイフモノ有リ。一尺二寸九節有テ、肺ノ臓ニ系統シテ有ルモノナリ。此裏手律備リ、人間ノ韻聲ハ此肺ヨリ出ルナリ。味ハ辛ヲ好ミ、活則大腸ニ摩回致ス。諸経ノ当、是ヲ以テ可知。口伝有。

村雨ノ殺ハ、咽ノ当リ陰也。下ハ胃ニ通系シテ、水穀ノ道路ナリ。飲食都テ胃ニ納ム。胃腑ハ脾ノ下ニ随テ位シテ居ル也。水穀ノ納所上脘ト云。臍ノ上五寸、水穀消化ノ地、胃ノ正中脘ト云。臍ノ上四寸、飲食腐熟シテ小腸ニ伝フ。幽門ト云。臍ノ上二寸、下脘ト云。小腸ノ上口ナリ。活生ハ脾ノ地摩回シテ補エハ醒。惣シテ殺ハ此ノ意ヲ以テ可知、餘ハ准之。

電ノ殺ハ、膽ノ腑ニ当ル日月ノ位ニ近シ。膽ハ肝ノ四葉ノ間ニ藏テ各別ナルモノナリ。胃ハ水穀ヲイレ、小腸ハ受モリ、膀胱ハ液ヲ受、大腸ハ糟粕ヲ受、五臓何モ無不受。膽ハカリ離テ水穀穢濁ヲ不受。肝葉ノ間ニ居テ、其精シキ天氣ヲ持テ守ル者也。人間ノ形骸ノ氣剛柔都テ膽ヨリ無不出。依テ分ハ膽ノ穀ス事ナク、此殺ハ連ル故稻妻ト云也。人間剛柔ノ氣ヲ司ル所源経也。口伝。

月影ノ殺ハ、肝ニ当ル昷也。肝ノ形ハ木ノ葉ノ始、七葉アリ。四葉ハ右ニ付居ル陰ノ部ナリ。三葉ハ左ニ付テ陽ノ部ナリ。常必偶陽ハ寄、依之可知。此殺ハ大事ノ当リ也。常必為ス昷也。肝膽ノ腑ハ、都テ人間剛強出ル所ナリ。月影ハ期間ノ辺ニ近シ。最稠ク経ニ当ル時ハ、力持ツ事難シ。故ニ思ノ外ニ吐息ヲ出シ、直ハ死ニ及事有リ。其時息絶テ表裏経絡補摩ト云事有トモ、ヨク活生スル事難シ。口伝アリ。

雁下ハ、両乳ノ辺ヲサシテ当ルナリ。此経ハ則心肺ニ臓ニ徹スル所也。心肺ニツハ上ニ位シテ下一

楊心流，長尾流躰術，天神眞楊流柔術「活法」について

寸ニ有リ。是第一焦ノ穢濁ヲ受ス，当ル所ノ経ハ両方各一寸ニ有リ。是等一ノ心臓ニ当ルト知ルベシ。心ノ臓ハ肺中ニ孕テ上位ス也。之ニ依テ膈膜ト云モノ蓋テ有故ニ，心肺ノ二ツハ下焦水穀ノ穢氣ヲ受ザル也。五臓ノ内ニヲイテ心ノ臓ハ至誠君主ノ位也。神明ノ寓スル所，一躰ノ神靈ナリ。外ノ臓腑ハ此心ノ臓ニヨリ達スル者也。此地少シ当リテモ，甚答ル所ナリ。是則天真ノ氣至ル所ナリ。最大事ノ殺ナリ。口伝有ナリ。

明星殺ハ，大腸，膀胱ノ二府ニ当ルナリ。臍上一寸ト，是ヨリ水ハ膀胱ニ下行シテ前陰ヘ出，糟粕ハ大腸ヘ行テ後門ニ出，之ニ依テ稠ク明星ニ当ル時ハ，二便覺ス出ナリ。大腸ハ右ニ位シテ居リ，後ヘ蟠リ有ナリ。膀胱ハ大腸ニ入テ組テ，前ニ蟠リ居ル所ハ陰交ノ地ト知ベシ。口伝有リ。

水月ハ，自流極意ノ大事ノ殺ナリ。一切ノ臓府経絡分レタル所ナリ。此水月ハ胃ノ中上下陽ニ当ル。之ニ依テ一切ノ殺ハ此理ヲ以テ助ク可キ神府ヲ云。是ハ腎心ノ性ヲ受タル氣経ヲカタツテ生府也。常ニ此府ハ陰陽トモ受，万風ヲ生ル府ナリ。則息絶テ少シノ間臓府ニ止リ，見ル内ニ空ノ如クナル府ナリ。此水月ハ活生ハナシ，先師モ致ラザル所ノ経ナリ。必慎ベシ。口伝アリ。

烏兎ノ当リハ両眼ナリ。頭ノ円ハ天ニ同シ。故ニ天ニ日月有テ，陰陽分ル。人ニ両眼有テ事物明白ナリ。自流ニ両眼ヲサシテ烏兎ト云事，日中ニハ三足ノ鳥有テ，月中ニハ玉兎有リ。是最陰陽ナリ。故ニ烏兎ト号ス。口伝アリ。」

大江嶋右衛門

元貞

片桐 晋之助

方矩」

また，楊心流においては，相手を制する技として当身技とともに絞め技の研究も盛んであったと伝えられており，その証左として，「楊心流死活之極秘」（文化七年（1811））を挙げることができる。その内容から，殺法としての当身技の解説とともに絞め技によって相手を制した際の，相手の状態を様々な視点から細かく観察して対処するための極意を著述したものとして興味深い。特に，絞め技が効いた際の様相，相手の呼吸の仕方，相手から伝わる脱力感，手足の痙攣，目の返り等によって相手が意識を消失し，機能脱落にいたる判定の基準が示されており，相手（敵）の生命への気遣い，やり過ぎの危険に対する戒めとも解することができ，現在の柔道の絞め技研究に対する示唆にも富む資料と思われる。

楊心流死活之極秘

殺サカイノ変

ハナシ様ノ変

手ニテアテ様ノ変

足ニテケ様ノ変

稲妻目当ノ変

水月目当ノ変

ウノケンノ変

半死ノ変

猫殺ノ変

○殺サカイノ変

シメテシバシスルトサカイキタルマツ目玉ヲカエス也ヤカテ右ノ足カ左ノ足ヲスルナリ・スルヲユ
ルス両手ノ指ヒリヒリスル時ユルス

○ハナシ様ノ変 口伝

スイブシシツカニトリアツカイスイフンカツタリトイワヌヤウニハナツスコシニテモカクリトナ
レハトイキト云モノ出テ氣ヌケルユエイキヌ 一略一

楊心流は、すでに天和・貞享（1600年代後半）の頃にその隆盛をみており、柔術としては古い流派に属する。また、発祥の地が長崎ということもあって、東洋医学（経絡経穴と急所の関連など）の影響を多く受けているのが特徴的である。楊心流では、絞め技と当身技を併用した優れた技法（殺法）が種々考案されたと伝えられているが、引用文献に見られる通り、絞め技においても、着衣を利用した多彩な技が示されている。例えば、袖車（そでくるま、着衣を巧みに利用した絞め技の一つ）などは今日の講道館柔道の固技の一つとして継承されている。然しながら、技の中核を成すのは急所（経穴）の打撃を中心とする殺法（当身技）であると考えられ、急所に対す研究が生理的効果を含めて盛んであったことを窺い知ることができた。更に、打撃によるダメージを受けた相手に対する処置、治療法としての活法も併せて研究、考察されてきた経緯も見られる。活法の内容、施技法など詳らかでない面も多々ある。しかし、今日天神眞楊流に伝わる内容とほぼ同じではないかと推察される。

長尾流躰術について

長尾流躰術の開祖は遠く戦国時代に遡り、文献伝承によれば、武田信玄と覇権を争った上杉謙信が武田の武将馬場信春率いる部下の「刺刀の術」に悩まされ、この術は飛鳥の如く相手の懐に飛び込んで刺殺する早技で、これを防ぎ敵を圧倒する術の考案を謙信が甥の長尾監物為明に命じて案出させたとう。流祖はこの長尾為明であり、命を受けた為明は、下野国二荒山に籠り、華嚴の滝に水垢離をして神霊に祈願し、修練の末長尾流躰術を創案したと伝えられる。従って、当初の技術体系は、甲冑着用時の合戦組討術であり、継承されている次の技にその姿を見ることができる。

「陰術手段」

・裏葉 ・鶏羽 ・萩風 ・発負

初期に案出された甲冑着用時の技のうちの三手段、別一手段。順に、髷を掴んで引きずり込むのに対抗する技、行違いの際抜打つ柄手を制し躰を捌いて捕り押さえる技、足で踏み潰しに来るのを捌いて倒す技、座礼のうちに髷を掴んで引きずり込むとき蹴りを入れて倒し腕の付け根を足で折り敷いて（肩固め）捕える技。

楊心流、長尾流躰術、天神眞楊流柔術「活法」について

「陽術鐵貫手段」

・戸指 ・丸木橋 ・男波

重みのある握り武器で甲冑を叩き、打撃を与える必殺技と伝えられる。

「柄鞘之術」

・屏風帖 ・猪牙 ・折返し ・玉簾

帯した刀で対抗する独得の方法手段。

甲冑での刀術に加えて、巧みな体捌きを利した当身技が織り込まれており、柄手封じを主眼とした技術内容である。加えて、秘伝とした抜刀術も伝承されている。

長尾流躰術の系譜を調べると、流祖長尾為明より十二世の前田光月（平成六年没）まで継承されている。所謂甲冑着用時の合戦組討術から出発した長尾流も、やがて徳川期に入って、甲冑で戦う機会も無くなり、素肌戦になると、関節技の折れ振ぎや急所当身が採り入れられ、日常護身までの術の完成をみた。これを成し遂げたのは加賀藩士で六世を継いだ雨夜覚右衛門である。加賀藩政時代、寛政四年（1792）に藩校「経武館」が創設され、長尾流躰術が経武館武術に採用となり、雨夜覚右衛門が出仕して多くの藩士に教授し、北陸道中興の祖と称された。技内容は前述と同様の三術構成で、陰術・陽術・柄鞘術から構成されている。長尾流躰術の正称は当身拳法手縛長尾流躰術で、武芸十八般の分類では、「小具足・捕物」に区分されている。前記経武館稽古割には、「躰術長尾流」の記載が見られる。やがて、経武館が廃校となり、明治政府の廃刀令が出るに及んで、柄手封じを主眼とした長尾流躰術は九派に分派し、終戦後にも巷間伝承としてその命脈を保っていたものの古伝は崩れていった。金沢工業大学関係者が古資料を基に復元し、今日まで郷土武芸として伝承されている。

長尾流躰術では、武道のみでなく、茶道、華道、九字、十字、大字、早九字、活などを会得して免許皆伝を受け、第十一代加賀藩主前田治脩公より賜った武門宗師の称とともに宗家を継ぐことになっているのが同流の特徴である。

長尾流躰術、一地方に伝わる古流柔術として、また特殊な技術内容も見られることから、幾度か調査を試みてきたが、特に活法に関する資料に乏しく、不明な点も多く、未だ詳細を明らかにできない。今後も調査を継続したいと考えている。

天神眞楊流柔術について

天神眞楊流の開祖は磯又右衛門正足である（文久三年（1863）没・七十六歳）。その生い立ちについては、「天神眞楊流柔術極意教授図解」（五代目磯又右衛門・吉田千春著、明治二十六年発行）に眞楊流元祖の略伝として、磯家に伝わる開祖の生い立ち、柔術修行から一流を開くまでの経過が述べられている。それによると、磯正足は勢州松坂の生まれで紀州家の藩士、本名は岡山八郎治。幼年より武術を好み、十五歳で楊心流の名人一ツ柳織部の門人となって楊心流を修業、織部の死にあって後眞之神道流の達人本間丈右衛門正遠に師事し修業を重ねて両流を極めた。更に諸国武者修業を経て実戦の中から当身技の有効性を体験し積年心血を注ぎ「眞の当」を完成させ、投げ技、関節技、絞め技の

中にこれを取り入れて技の威力を大にした。天保四、五年ごろ、天神眞楊流を称え、江戸に出て柔術の教授を始め、磯家に入って姓を磯と改めた。又、楊心流・眞之神道流合流・天神眞楊流とも称えられているが、その背景には、磯正足が自ら学んだ楊心流と眞之神道流とを合せた一つの教授体系を苦心の末に作るとともに、自らが考案した新しい技をも加えて天神眞楊流を起こした経緯があり、眞楊流を称えた当時の心境を窺い知ることができる。江戸に出てより幕臣となり、神田お玉ヶ池に道場を設けて広く子弟の教導に当り、講武所の師範をもつとめ、一二四本の技の手数の外、殺活の秘術の教授、伝承に努めた。

天神眞楊流の流旨・精神については、「天神眞楊流上段之巻」に、

夫レ人、カヲ以テ争ヘバ、人マタカヲ以テ之ヲ拒ム、何ゾ益センヤ。兵道・兵術ニ及ンデハ、敵ノ転化変動スルコト常ナリ。所謂、楊柳ノ風ニ靡クヲ觀テ、和徳大悟ノ一ナルヲ得、始メテ天神眞楊流ト号ク。和ハ徳ノ花、武ハ徳ノ守ナリ、神妙ソノ中ニアリ、後世ノ門子敬シテ秘ス可シ。

と述べられている通り、楊心流と同じ流旨・精神と見ることができよう。

天神眞楊流の系譜を調べると、流祖磯又右衛門正足より五代目の磯又右衛門正幸を以って磯家は絶家となっているが、師範家は継承されて今日に至っている。天神眞楊流は幕末に隆盛をきわめ、柔術諸流派の中で最も秀でた流儀と伝えられており、残された伝書、資料も多い。

伝書「地之巻」(初目録に与え、柔術初伝技法とともに、打撲、捻挫の整復法の伝授)、「天之巻」(本目録に与え、柔術中伝技法とともに、骨折、脱臼の整復法の伝授)、「陽之巻」(免許に与え、五臓六腑や経絡経穴(急所)の一覧図を伝授)、「陰之巻」(皆伝に与え、殺活法、薬法等の伝授)、「人之巻」(相伝に与え、柔術の高度な技法とともに、高度な殺活法、経絡経穴の伝授)、「網之巻」(相目録して相伝者に与え、死相鑑別法、柔術の高度な技法とともに、高度な整復技法の伝授、哲理等の伝授)等が良く知られるところである。

「地之巻」には、

「柔術者無事之根元、治国乃基、壯士並立ノ要ニシテ、弱ヨク強ヲ制シムルー略一」技として先ず「手解く」十二本、を置き、次いで「初段居捕」十本、「初段立合」十本、「中段居捕」十四本、「中段立合捕」十四本、特別の心得として「五箇之伝」と「七箇之極意」の教授内容が示されている。七箇之極意はこの流の特色の一つといわれる当身(殺法)に関するものである。

手 解

鬼拳	振解	逆手	逆指
片胸捕	両胸捕	小手返	両手捕
氣捕	天倒	扱捕	打手

初段

居捕

眞之位	添捕	御前捕
袖車	飛違	抜刀目附
鑑返	両手捕	壁添

楊心流，長尾流柔術，天神眞楊流柔術「活法」について

後捕

立合

行違 突掛 引落

両胸捕 連拍子 友車

衣被 襟投 手髪捕

後捕

中段居捕

一，眞之位 一，手巾捕 一，左胸捕

一，右胸捕 一，御前捕 一，袖車

一，飛違 一，技身目附 一，奏者捕

一，柄止 一，善越 一，両手詰

一，左右曲 一，引立

中段立合捕

一，行違 一，向山影 一，後山影

一，腰附 一，小手返 一，頭捕

一，連拍手 一，廻込 一，柄碎

一，帰投 一，壁添拒 一，腕挫

一，諸別 一，大小捕

五箇之伝

一，片羽折 一，対人心得之事

一，運氣之事 一，忍太刀之事

一，金生水之事

七箇之極意

烏兎 霞 人中 独鉗

秘中 松風 村雨

大尾

「天神眞楊流柔術極意教授図解」に、「我眞楊流ニ於テ，形ハ手解ヨリ始マリ，大尾迄順序ヲ立テ定規ヲ設ケ手合ヲ教ユ」とあり，柔術の技術の教授内容とその順序を知ることができる。技術内容は，関節技，絞め技とともに止めをさす当身技をおり混ぜたものであり，いずれも楊心流，眞之神道流の技に新たに磯正足の創意工夫による技が加えられている。

次に，「天之巻」においては，立合之事十本，居捕之事十本に加えて，雲上之巻として，当身の急所，釣鐘，雷光，月影，雁下，小寸，明星，水月の記述が見られる。

また，「柔術経験絡人之巻」では，天神眞楊流柔術において用いる当身の身体における部位を示し，次いでその部位の内部に蔵している内臓の位置，名称，他の臓器と関連したその機能等について解説を加え，当身の理論を体得させようとしたものである。ここでは，「松風ノ殺」，「村雨ノ殺」，「電ノ

殺」,「月影ノ殺」,「雁下ノ殺」,「明星ノ殺」,「烏兎ノ当」の計七つについて記述されている。

次いで、活法として、「誘活法」,「襟活法」,「死相」,「陰囊活法」,「惣活法」などが示されており、「天之巻」においては、打撲治療に用いる薬の製法も示されている。

これらは、楊心流、眞之神道流において早くから重視し開拓されてきた分野であり、この合流を称える天神眞楊流としても同様に重用した面であったといえることができる。

総合的にみれば、楊心流の流旨をそのまま継承したこと、その技術においては、他の流派と同様に、居捕、立合などの技術で編成されているが、寝技に優れていたこと、当身、活法、怪我に対する施薬法、製薬法を伝えていることなどが天神眞楊流の特色とみることができる。

天神眞楊流は、今日でも師範家がその流儀を継承している。幕末隆盛を極めたといわれる流派だけに、その技術内容も充実しており、文献伝承資料も多く、特に殺・活法の研究内容、伝承内容を知ることができる。文献的には、多くの部分で先に取り上げた楊心流と共通しており、楊心流の技術体系、殺活法の急所などはより精密に類推することができた。また、天神眞楊流における技術内容、急所（経穴）の細部にわたる生理・解剖学的研究経過などは注目に値する内容であると思われた。

次に、免許皆伝で師範家を継ぐ久保田敏弘氏記述の天神眞楊流柔術「活法」の内容、施技法などを引用して参考に供する。

活法とは、武術の斗争、修練中におきた諸状況（例えば、手、拳、武具等で突かれる・打たれる・倒される・絞められる・蹴られる・水に溺れる等）によって仮死状態（意識不明・気絶・卒倒）に陥った時に蘇生される方法。昔は武士の心得の一つとして、身に付けた。

時代の経過と共に、武家のみならず一般家庭の日常生活でおこる諸状況（例えば、高所から落ちる・首吊・物にぶつかる・喉に物が詰まる・毒氣にあたる・熱射病・日射病等）を生活の知恵として、広い意味で活用されてきた。

今日では、医療器具を使用しない、一次救命処置、蘇生法の一つである。

ここでは、絞め技による仮死者（落ち・意識不明）の蘇生方法について述べる。

活法を施す心得

(1) 志気力合一不二妙

志に従って気が通い、気の通うところ力が集まるは、一定の理である。

気とは、体内にある無形のもので、気の起こりを陽といい、静まるを陰という。

口頃、体内に気を満たすことが肝要であり、修業が進んで理に適った技が出せるようになれば気と一体させ、より修練を重ね自在に気を起こし、静めることが可能になり、日にみえない働きとなって技が威力あるものとなる。

※「落ち」があり、自らが活法を施す立場の時、仮死者に自分の全精気を注入して、蘇生させるという強い志をまず持つこと。

(2) 前心・通心・残心の用法

前心とは、技を行う前の心構え。

楊心流、長尾流躰術、天神眞楊流柔術「活法」について

通心とは、技の挙動中の心の動き。

残心とは、挙動を終わって、我が目を相手に注ぐこと。

※施術者は仮死者の体格、どのような状態（舌の巻き込み・痙攣・泡・脱糞尿の有無等）であるか瞬時に見極め、施す活法に適した状態に仮死者を位置させ、自らも位置につく。（前心）。仮死者の体格をみて、脊柱に当てる掌底、膝の強弱、腹部を押し上げる力の強弱に配慮しつつ、仮死者の蘇生を確認する。蘇生しない場合、次に施す活法の種類の判断、このような心遣いをする。（通心）。蘇生した時、意識の確認・服装を整える・休息させる。（残心）。

(3) 施術者は、丹田に力を入れ（臍下に心身の精気を集める）、身体の中心を正し、心静かにして、速やかに活を施す。

次に活法の種類を述べるが、仮死者の「落ち」の深さが判断しかねる場合もあり、速やかに活を施す必要上、一人で施術ができ最も簡単な方法から順次、列記する。

尚、この順序は仮死者の「落ち」の深さに応じて、研究された結果である。

活法の種類

◎一人で施す方法

〔一〕誘い活法

第一法（仮死者の側方から施す）

仮死者 長座

施術者 (1) 仮死者の左体側に左膝をつき右立膝。

(2) 左手腕にて仮死者の胸部、二の腕を制し、右掌底にて脊柱六、七節を突き上げ、仮死者が聊か仰向く様にする。

第二法（仮死者の後方から施す）

仮死者 仰向けに寝かす

施術者 (1) 仮死者の右側方に位置し、左膝をつき下腹部に跨がり右立膝。（仮死者に体重をかけない）

(2) 胸部より腹部にかけて両手で摩擦する。

(3) 仮死者を長座にし、背後に立って右膝頭を脊柱六、七節にあて、左足は後方に引き、両手を肩より両脇にさすり降ろし、両手で上にすりあげる（胸を開く様）と同時に右膝頭を突き上げる様にし、仮死者が聊か仰向く様にする。

誘い活法は脊髓を叩く、押す、突くの刺激と肋骨・腹部運動によって、心臓に脈動を促し、肺に呼吸運動を蘇らせる。別名擦衝法ともいう。

〔二〕襟活法

仮死者 仰向けに寝かす。

施術者 (1) 仮死者の右側方に位置し、左膝をつき股のあたりに跨がり右立膝。（仮死者に体重を

かけない)

- (2) 胸部より下腹部（臍の下）まで数回摩擦する。
- (3) 右側方に戻り、左腕を頸部にあてがい、左手親指を内にして左横襟を握りおこし、左足を立てて膝にて仮死者を後方に倒れないように制し、右足は仮死者の右側方脚の近くに膝をつき、臍下四センチ位を^{●●●●}右掌底（四指間を密着させ、親指との間を開く。之を^{やれど}矢筈という）にて^{●●●●}突き上げると連動させて、首をうつむくように下方に引き寄せ^{●●●●}るを同時に行う。

襟活法は圧迫により胸部・肺臓を開かせ、腹部運動の作用をもって、肺に空気を入れ呼吸運動をおこす。

◎二人で施す方法

総活法（誘い活法・襟活法施しても蘇生しない時に施術する）

総活法には、肺入活法・気海活法・裏活法の三法がある。

〔一〕肺入活法

仮死者 仰向けに寝かす。

施術者 仮死者の右側方に位置し、左膝をつき腹部あたりに右立膝。（仮死者に体重をかけない）

助 者 仮死者の頭部あたりに座す。

施術者 両手で左右胸部を上下交互に数回摩擦し、臍より四センチ位上のあたりから水落にかけて、^{●●●●}両掌底（特に親指付け根高い所）を並べ、^{●●●●}気合と共に突き上げる。

助 者 両手で仮死者の両腕を握り、施術者の突き上げに^{●●●●}連動して仮死者の^{●●●●}両腕を自分の方へ引く。

施術者 立ち上がり仮死者の両足を握り、体の方へ屈折する。（腹部を圧迫する）

助 者 両手をゆるめて元に戻し、施術者が両足を握り体の方へ屈折するのと連動して、仮死者の^{●●●●}両腕を自分の体の方へ引く。

※施術者・助者共に同じ動作を三度繰り返す。

肺入活法は肺臓を開かせ、横隔膜に刺激を与え、腹部呼吸を促し、肺に空気を入れ、大動脈を刺激し心臓の脈動を誘い、呼吸運動をおこさす。

〔二〕気海活法

仮死者 仰向けに寝かす。

施術者 仮死者の右側方に位置し、左膝をつき、股のあたりに跨がり右立膝。（仮死者に体重をかけない）

助 者 仮死者の頭部あたりに座す。

施術者 特に臍下を両手でよく摩擦し、臍下（臍より四センチ位下）を両手で強く^{●●●●}突き上げる。

助 者 両手で仮死者の両腕を握り、施術者の突き上げに^{●●●●}連動して、仮死者の^{●●●●}両腕を自分の方へ引く。

楊心流，長尾流脉術，天神眞楊流柔術「活法」について

気海活法は大小腸・脾臓・胃・横隔膜を刺激し，肺臓，肝臓を開き呼吸運動をおこさす。

※気海とは臍下の腹部全体をいう。

〔三〕裏活法（一人で行う）

仮死者 腹這い

施術者 (1)左膝をつき，股のあたりに跨がり，右立膝。(仮死者に体重をかけない)

(2)背中を両手で上下に摩擦する。

(3)乳の後方下（水落の後方部下・急所「電光」）あたりから両掌で強く押し，突き上げる。

裏活法は脊髄大動脈・胃腸・横隔膜・交感神経を刺激し，肺臓，肝臓を開き呼吸運動をおこさす。

次の引用文献は，明治23年（1890）刊行の井ノ口松之助著「兵法要務柔術剣棒凶解秘訣・武道凶解秘訣」である。ここには，総合護身術を眼目とした柔術，撃剣，棒及び早縄鎖の用法に加えて，殺活の伝として，殺法（当身）に関する急所と蘇生法活法に関する著述が残されている。既に講道館柔道が創設されて8年を経過しているが，著者井ノ口松之助は天神眞楊流を学んだ人で，護身術としての殺法（当身）とともに，日常生活に応用可能な活法の意義を認めている。楊心流，天神眞楊流両流において，当初は殺法による急所（経穴）への打撃効果とともに，ダメージを受けた相手に対する活法に関して研究，考案がなされたが，やがて薬餌療法，整骨・整復法なども研究されて民間医療的内容が確立されていった歴史的経過を見ることができる。これらは，今日の第一次救命救急処置に相当するものと考えられる。

ここでは，図解された活法に関する記述のみを引用する。

活法圖解

此活法ハ高所ヨリ落テ氣絶ナシ或ハ縊死セシ者ヲ蘇生サスルノ術ナリ 先ヅ氣絶シタル者仰向ニナシ我ガ右手ヲ以テ徐カニ抱キ起シ圖ノ如ク窒息者ノ臀ヲ地ニ居ヘ左手ニテ倒レザル様受ケ置キ而シテ○死相ノ部 此死相ヲ見ルニハ仰向ニ寝シテ第一目鼻口耳肛門（ハ穴ト号ス）等ヲ能ク改メ惣脉ヲ見テ害者ノ両手先ヲ害者ノ前ニ重テ左膝ヲ突キ右膝ヲ立テ左ノ手先ニテ害者ノ両手ヲ押ヘ右肩ヘ右手ニテ抱込ミ静ニ起スナリ 此ハ其ノ人ノ手勝手ニテ左右トモ座ス此圖ノ裏ニテ思ヘハ同シ事 如此シテカラ活法ヲ施ス者ナリ 凡テ人体ヲ改メルニハ曾テ死人ト偽リ敵ヲ引寄せ不意ニ人ヲ悩スモノモ有シ故ニ変死者ノ手ヲ我膝ノ下ニ押付テ置テ水月ニ脉有カ無カヲ改メハ穴並ニ死相ヲ見ルヘキモノナリ



図1 死相之部

○誘之活法 第一部死相ヲ能ク見テ害者ノ後口ニ立チ両手先ヲ延シ胸ヲ能ク撫摩リ^{ナデサス}圖ノ如ク左ノ手ニテ害者ノ左リ肩口ヲ抱込右手指ヲ揃エ^{ホネツシ}骨節ノ上ノ一番高キ節ヨリ四五節目ノ所ニ^{テノヒラ}右掌ノ當ル所ニ^{オシアテ}押當テ左足ヲ立膝ヲナシ右膝ヲ突キ（エイ）ト我息ヲ害者ニ移ス心持ニテ活所ヲ強ク當ルナリ 害者ヲ少シクコメメル位ニシテ^{クワツ}活ヲ行ナフナリ 此ハ左リヨリ見タル圖ナリ又其ニト同一ノ者ユヘ能ク書画ヲ心得ルヘシ此モ其人ノ都合能ク手足ノキムタル方ニテ行フ …略…



図2 誘之活法

楊心流，長尾流躰術，天神眞楊流柔術「活法」について

○同左ヨリ見タル圖 ^{タカフシ} 点ノ高節ニ ^{オシアテ} 指先ヲ押當即チ挿画ノ如ク右掌ノ点ノ所ヲ押當抱込ミ害者ハ體ヲ少シクコシメテモ首ハ仰向クヤウニ ^{テノヒラ} 指先ハ放シ手ノ平ニテ（エイヤ）ト声ト共ニ活法ヲ施スベシ此ハ我レニモ息ヲスト吸込ミ害者ニ移ス時ニハ其者ヲ生ス故心ヲ落付一度デハ戻ランモノ故ニ五六度モ幾度モ是ヲ施スベシ 実ニ兵士警官醫師又江湖諸君常ニ心得置ニハ実ニ必用ノ者 此ハ各先生達ノ口傳秘傳ニテ書籍ニ著ス者ニハアラネト諸君ヘ忠告ノ為メ今般特別ニテ賣本ニセルナリ榊原先生田子先生吉田先生其他ノ各先生ニ免許ヲ受テ今此レヲ天下ニ弘メルナリ諸人常ニ是ヲ心得居ルトキハ助ニナル故天下ニ弘メルモノナリ



図3 誘の活法，左ヨリ見タル圖

○誘活法ニ式ノ部 前ノ死相ニモ記ス通り害者ヲ引起シテ害者ノ後ニ回り両手ニテ害者ノ腹中ヲ好ク撫サスリ害者ノ両乳ノ下月影縮妻ノ活所是ヲ十指ニテ延シ此時我カ下腹ニカヲ入レ左足ヲ少シ後口ニ立右ノ膝頭ヲ害者ノ活法骨ト電光トノ間ニ押當テ圖ノ如ク右足先ニカヲ入レ我カ息ヲ害者ニ移ス心持ニテ（エイヤ）ト掛声ト共ニ膝ハ下タヨリ突上ル両手ハ圖ノ如クノ所ヨリ手ヲ下ヨリ摩上ル 一度ニテ帰生セズハ五六度及ヒ幾度モ行フヘシ

○胸○脾腹打○氣絶○女子嬭○卒血等ニ此法ヲ行フヘシ



図4 誘活法二式の部

○襟活法 此モ死相ヲ見テ中指ト人指トヲ重ネテ右ノ手先ニテ害者ノ左リ肩口ヲ抱込左ノ膝ヲ立テ
 右膝ヲ突キ^{ヘソ}臍ヨリ二寸計リ^{ミヤウジヤウツツ}明星活人ニヨリ大小アル故我カ考ヘニテ行フナリ 下ヲ前書記ス通り
 指リ指先ニカヲ入レ（エイ）ト声ト共ニ我カ息ヲ害者ニ移ス心得ニテ下ヨリ上ニ突上ルナリ圖ノ如ク
 見テ常ニ心得置ベシ 此モ前ニ記ス誘ノ活ノ末ニ病害ヲ記ス通りナリ高キ所ヨリ^{オデ}落又○癲癰○首^{テンカン}縊^{クビクハリ}
 ○水死等ニ行クモノナリ コレモ其人ノ手ノ利方ニテ行フヲ好シトスルナリ



図5 襟活法

(てづか・まさたか 経営学部教授)